０４／０７／２５　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　副牧師

主　　題：満足欠乏症との訣別３
聖書箇所：詩篇２３篇

今朝も詩篇２３篇から学びを続けて行きましょう。私たちが人生の困難な場面に遭遇する時、私たちが考えるのは、まるで砂時計の中に置かれているかのように感じることです。初めは平安でも立っているはずのその足元が下へと流れ出て行くとき、もうそこから逃れることができないかのような錯覚に陥ります。もし本当に、私たちが砂時計の中に住んでいるような者であるとするなら、私たちはそこから逃れることはできないでしょう。けれども、ダビデがこの詩篇２３篇で教えることは、私たちは偉大な神によってすばらしい所へ導かれているのだということです。私たちは人生の困難に囚われているのではないと言います。いったい、どのようにして私たちは人生に満足をもって生きることができるのでしょう？どのようにして喜び、希望を失わずに、困難、苦しみに満ちた、悩み悲しみの多い生涯に勝利して生きて行くことができるのでしょう？ダビデはそのことを私たちに教えてくれるのです。満足の秘訣はどこにあるのかと。これまで２回のメッセージを通して、私たちが満足を持つために、◎神に焦点を当てること、そのためには、神がどのような方かをよく知ること、そして、神と個人的な関係をもつこと、偉大な天地を創造された神は、私個人の羊飼いであるとダビデは確かに知っていたのです。そして、それを知っていたゆえに、彼は正しい結論を導き出しました。どのような結論でしょう？どんな状況の中に置かれても、私は全知全能であり、偉大な主権者である神を知っているがゆえに、乏しいものはない、という結論だったのです。これらのことをダビデは１節で教えたのです。２番目にダビデが教えたことは、◎私たちは神の導きに信頼を置くこと、です。２－３節からそれを教えました。神はどんなところに私たちを導いてくださるのか、どのようなことを私たちにしてくださるのか、神は私たちに安息、安らぎを与えてくださるということです。休息です。また、神は私たちに回復を与えてくださるのです。どんなに心が萎えた状態でも。そして、神は私たちを義の道に導いてくださるのです。これは疑う余地のないすばらしい導きです。なぜなら、神は**「御名のために、」**それを為さるからです。ご自身の栄光がかかっているのです。羊飼いの名誉が羊の状態にかかっていたのと同じように、神のすばらしさは神の民である私たちがどのような状態に置かれているかにかかっているのです。それゆえに、すばらしい偉大な、決して欠けることのない神は、私たちに対して常に最善をしてくださるのです。私たちが神の導きに信頼を置くとき、たとえ、どのような困難な状態にあっても、神は安らぎと回復を与えてくださるゆえに、心からの満足を持つことができるのだとダビデは教えるのです。

今日は３番目のポイント、私たちが満足を得るために、私たちは神の守りに信頼を置かなければならないということを見て行きます。

どのような状況の中にも満足できる秘訣

:1主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。
:2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
:3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。
:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。
:6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

Ⅲ．神の守りに信頼を置く　　４－５節

４－５節を注意深く見るとき、私たちが願うことは私たちもダビデと同じように、どのような状況にあっても、神のゆえに満足を見い出すことです。不安に駆られるのではなく、恐れに乱されるのではなく、自暴自棄になったり、自己憐憫に陥ったりすることなく、主が私を愛してくださっているゆえに、主に救われたがゆえに、喜びをもって、心からの満足をもって生きることができるのだという確信をもつのです。たとえ、これ以上ない最悪の状態にあったとしても、神の守りに信頼を置くことをダビデは教えます。敵が間近に迫って来ても恐れることはない、神が守ってくださるのだとダビデは言います。この２３篇がどのような背景の中で書かれたかを思い出してください。４－５節に「わざわい、敵」と

いうことばがあり、「死の陰の谷」という表現をみるとき、ダビデに危険が迫っていたことが分かります。しかし、その中にあっても私は満足する、神は羊飼いであるから私を守ってくれるとダビデは言います。

ダビデに主の守りを確信させるものは何でしょうか？それを一つずつ見て行きましょう。

１．神の臨在があるから　４ａ節

神の臨在は私たちに神の守りを信頼させるようにするのです。３節の終わりに**「私を義の道に導かれます。」**とあります。神はご自身が贖った羊たちを正しい道へと導いてくださるのです。ダビデはそのことをよく知っていたので、そのことに確信をもっていたのです。たとえ、どのような道であってもそれが最善であることを疑わなかったのです。しかし、神が導かれる義の道は常に緑の牧場ではありません。「死の陰の谷」と訳されていますが、それは私たちが義の道に導かれるとき通るその道を指しているのです。この表現は直訳すると、これ以上ないほど深い暗黒の谷となります。ヘブル語の原語では必ずしも「死」という意味をもっていません。あらゆる危険、不幸という意味ですが、二つの訳があります。「死の陰」と「暗黒」です。もっと直訳的に訳しているのは、旧約のアモス書５：８です。**「すばる座やオリオン座を造り、暗黒を朝に変え、昼を暗い夜にし、海の水を呼んで、それを地の面に注ぐ方、その名は主。」**この「暗黒」が「死の陰」と同じことばなのです。このことばが比喩的に使われるとき、確かに「死」という概念がないわけではありませんが、死だけなら余りにも意味が狭いのです。死ぬようなことというのではなく、私を不安にさせること、傷付けること、困難なことなど、あらゆることが起こっても、と言っているのです。当然、その中には病や死も含まれるのです。それが「死の陰」ということばで表現されているのです。

この４節には興味深い表現がいくつかあります。**「死の陰の谷を歩くことがあっても、」**と「歩く」ということば、これは継続を意味します。死の陰の谷を歩き続けているのです。ダビデは神に信頼して神の後を歩こうとしていました。緑の牧場やいこいの水のほとりは喜んで通って行くでしょう。しかし、一歩角を曲がって真っ暗闇の道に入ると足がすくんでしまいます。ダビデはそのような暗黒の中でも歩き続けると言うのです。ダビデはそれほどまでの信頼を神に持っていたのです。神はみことばを通して、私たちが救われた後、平坦な道を歩き続けるとは約束しておられません。むしろ、その反対です。迫害があると言います。けれども、神は私を愛してくださっているのだから、あらゆる困難から私を守ってくださると考えるのです。そこで、困難が襲ってくると戸惑ってしまって、神はもう私を愛しておられないのでは？と疑ってしまいます。ダビデは偉大なる神の導きが義の道であることをよく知っていたのです。ゆえに、その中で立ち止まることなく歩み続けたのです。ダビデにも恐れや不安はあったのです。詩篇の他の箇所にはダビデの叫びが記されています。このときも例外ではなかったでしょう。けれども、彼は言います。**「私はわざわいを恐れません。」**と。これがダビデの宣言です。恐れをもつ必要はないと。ここで使われている「わざわい」は肉体的なさまざまなわざわいとともに、道徳的なあらゆる悪も指しています。たとえ、そのわざわいが敵であっても、病であっても、罪であっても死であっても、私は恐れないと言うのです。人生の暗黒というほどのところに置かれているとしてもです。

ダビデはなぜ、そのように言えるのでしょう。その理由がこの後に書かれています。**「あなたが私とともにおられますから。」**と。神が私とともにおられる、神の臨在がそこにあるからだと言うのです。この事実がダビデの確信なのです。ここで、大切なことに目を留めましょう。１－３節で羊飼いが神で私たちが羊であるという比喩が使われていましたが、ここでは羊飼いはどこにいるでしょう？羊の群れの前、先頭を歩いて羊を導いて行きます。４節ではどうでしょう？私たちが暗黒の中にいるとき、羊飼いである神は私の真横にいていっしょに歩いてくださるのです。

神の臨在のすばらしさ、それゆえに与えられる守りのすばらしさはみことばを通して多く教えています。たとえば、イサクが約束の地を彷徨し、どこに寄留すればいいのかわからないとき、神はこのように言われました。創世記２６：２４**「主はその夜、彼に現われて仰せられた。「わたしはあなたの父アブラハムの神である。恐れてはならない。<u>わたしがあなたとともにいる</u>。わたしはあなたを祝福し、あなたの子孫を増し加えよう。わたしのしもべアブラハムのゆえに。」**。また、ヤコブに対しては、創世記２８：１５**「見よ。<u>わたしはあなたとともにあり</u>、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」**と、ヤコブが自分の家を離れて妻を捜しに出て行く、そのような新しい出発に際して神はヤコブに語られたのです。また、モーセ亡き後、イスラエルの民をカナンの地に導き入れるという大きな責任を負ったヨシュアに対して、ヨシュア記１：５**「あなたの一生の間、だれひとりとしてあなたの前に立ちはだかる者はいない。<u>わたしは、モーセとともにいたように、あなたとともにいよう</u>。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」**。捕囚に連れて行かれるという宣告を受けたイスラエルの民に対して、神はイザヤを通してこのように言われます。イザヤ４１：１０**「恐れるな。<u>わたしはあなたとともにいる</u>。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」**。若くして人々に滅びのメッセージを伝えるために

選ばれたエレミヤは、その若さのゆえに「そのような働きはできません」と神に訴えました。神はエレミヤにこう言われました。エレミヤ１：８**「彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。――主の御告げ。――」**。イエスは弟子たちに対して、天に上げられる前にこう言われました。マタイ２８：２０**「また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」**。希望のない暗黒の中にあっても、私たちはすべての恐れを取り除くことができるのです。なぜなら、神が私とともにいてくださるからです。圧倒的な守りがあるのです。

もう一つの大切なことを見ましょう。１－３節ではダビデは神のことを３人称で呼んでいます。「主は羊飼い、…主は…」と、主、すなわち「彼」とか「あの人、あの方」というのです。ところが、４－５節を見ると、「主は」ではなく「あなた」と変わります。彼の知識は祈りに変わるのです。神に対する知識が実践的に自分のものとなるのです。人は知識を誇りますが、その適用がなければむなしいことです。人生の困難は私たちを神に近づけるために必要なのです。そのとき私たちは、神に対して「あなたの助けが必要なのです」と言います。ヤコブ１：２に**「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。」**とある通りです。

２．神のすばらしいケアがあるから　４ｂ節

４節の後半に**「あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」**とあります。「むち」ということばは直訳すると「こん棒」です。この二つの道具「こん棒と杖」は神の守りと導きを表わします。また、そこには心配りがあります。羊飼いたちはこん棒をもって、羊を襲ってくるものに向かいます。杖は羊を導くために使います。ダビデは言います。どんな危険があっても、全能の神はそこで私たちを守ることができるのだと。そして、私たちに最善の心づかいをしてくださるのです。ゆえに、それらが私の慰めであるとダビデは言います。このような神がそばにいてくださるから私は安心を得、十分であると。

３．神が安全、安心を与えるという約束があるから　５節

５節には**「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、」**とあります。１－４節までは羊飼いと羊の話をしてきましたが、５，６節でそのイメージが変わります。どのように変わるのか、今度は客人とその客をもてなす家主になります。この時代にはホテルなどありません。羊飼いたちは羊を危険から守り、自らの安全のためにも安心して身を寄せる所が必要でした。彼らは村に入るとそこの有力者の所に行って助けを求めるのです。どうぞ私を養ってくださいと。そこで表わされる関係がダビデが５，６節で言わんとしていることです。このような関係は旧約聖書の中にいくつか出てきます。創世記にアブラハムが三人の客人を迎えるところがあります。ソドムとゴモラを滅ぼしに行く天使たち、それは神が人間として現われた姿ですが、アブラハムはひれ伏して彼らを迎え入れ食事を整えるのです。彼らを養おうとします。そのうちの二人がソドムに行きます。創世記１９：６－８に書かれていますが、そこで何が起こるのか、ロトがその二人の客人を迎え入れたところ、ソドムの住民がやって来て彼らを出せと言います。けれども、ロトにはその客人を迎え入れたために彼らを守るという責任が生じたのです。そこでロトはこのように言いました。**「ロトは戸口にいる彼らのところに出て、うしろの戸をしめた。:7 そして言った。「兄弟たちよ。どうか悪いことはしないでください。:8 お願いですから。私にはまだ男を知らない二人の娘があります。娘たちをみなの前に連れて来ますから、あなたがたの好きなようにしてください。ただ、あの人たちには何もしないでください。あの人たちは私の屋根の下に身を寄せたのですから。」**と。どんなことをしても客を守るというのです。ダビデが言うのは、私は神の家に客として迎えられた、テーブルが整えられるということです。食事が与えられることによって確かにこの客人を私の家に迎え入れるという宣言をしたのです。彼らに交わりを与え、休息を与え、必要を備え、守り安全を備えるというのです。敵は何もできません。皆さんはこの神の家に入れられているのです。客ではなく神の家の家族として迎え入れられたのです。神は言われます。わたしはあなたを守らないでいられようか、あなたの安全を保障せずにいられようかと。詩篇９１：４－９にはこのようにあります。**「主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。「主の真実は、大盾であり、とりでである。:5 あなたは夜の恐怖も恐れず、昼に飛び来る矢も恐れない。:6 また、暗やみに歩き回る疫病も、真昼に荒らす滅びをも。:7 千人が、あなたのかたわらに、万人が、あなたの右手に倒れても、それはあなたには、近づかない。:8 あなたはただ、それを目にし、悪者への報いを見るだけである。:9 それはあなたが私の避け所である主を、いと高き方を、あなたの住まいとしたからである。」**。私たちは主の御翼のもとに守られているのです。神は約束されます。わたしはどんなことがあってもあなたを守り続けると。それが分かったとき、私たちは不安を抱くことがなくなります。人生に恐れを抱いて生きる必要がないのです。パウロは言います。ローマ８：３１－３２**「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。:32 私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」**。私たちも同じ信頼を主に対してもつことができるの

です。主は私たちを守ってくださり、安全を保障してくださるのです。主は私たちに宴を設けてくださっていて、そこで私たちがくつろぎ、安らぎを得、満足することを保障してくださっているのです。

私たちはしっかり覚えるべきです。どのような神が私の羊飼いであるのかを。確かに今はまさに暗黒の中にいるかもしれません。しかし、あなたの横には神がおられ、神はあなたをその宴へと導こうとされているのです。神はあなたをあらゆる敵の手から守ってくださり、すばらしい祝福を与えようと望んでおられるのです。今、緑の牧場にいるならそれゆえに主に対する感謝をもたなければなりません。主のすばらしさを実感することで、困難な日に備える必要があるのです。ダビデは私たちにチャレンジします。あなたは満足をもっていますか？そのように生きていますか？と。確かに人生にはいやなことがたくさんあります。それが無くなるという保障は聖書のどこにもありません。しかし、確かに保障されていることがあります。神は私たちの羊飼いであり、その羊飼いは私たちを圧倒的な知恵と力で守り続けてくださるということです。そのことが分かっているなら、私たちは喜びと満足に満たされて生きることができるのです。

ダビデはこの５節でもう一つのことに触れていますが、それは次回にしましょう。